

キャリア支援とビジネス実務教育

Carrier Support and Business Education

金岡敬子

Keiko KANAOKA

キーワード：キャリア支援、社会人基礎力、資格試験、一億総活躍社会

はじめに

近年、教育現場において特にキャリアを支援する教育科目では、学生が将来生きていく社会が、今後予測できないほど変化し、職業選択にも影響するという現実を認識したうえで行われている。その理由として、今後起こりうる少子高齢化社会の到来や、人口の減少と共に生産年齢である人口の減少、さらに情報化社会における産業構造や就業構造の変化があげられる。

そのため、今後の高等教育機関でのキャリア支援の目的は、現在の状況からのみ将来を判断することしかできない学生の育成ではない。学生が知らないことへの興味・関心を抱きながら、予測できない将来の状況に恐れず挑戦を続ける姿勢を育成することである。そして、学生は生涯継続的に学習意欲を持ちながら主体的に考え、自らの生きたかを選んでいく姿勢が求められる。

キャリア教育は、「将来の社会人、職業人として自立できるために必要な力や態度を発達させる」(文部科学省, 2010)ことを目標としているが、そのキャリア教育の一環として、「体験学習」が重視されており、インターンシップでの就業体験もその一つである。しかし、就業体験で学生が成果をあげるためには、事前に社会人基礎力の育成を十分に行っておく必要がある。

本稿では、キャリア支援に関する教育としてビジネス実務教育を通して、体験学習(インターンシップ等の社会と接点のある授業科目)を学外で行う前に、学生にとって必要なキャリア支援の方向性を探る。そして社会人基礎力で何が不足しているのかを確認するため、アンケート調査を実施し、調査結果を考察することで、今後の学生支援に役立てることを研究目的としている。

1. キャリア支援について

1-1 キャリア支援の必要性

心理学者のスーパー(D. H. Super)は、職業を中心としたキャリア発達の考え方に生涯発達心理学の観点を導入し、人が生涯(life span)の中で出会ういくつかの基本的な役割(life role)の連続をキャリア(life career)と言い、キャリア発達は自己概念実現の過程であるとしている。

また、人はそれぞれの役割（career）を介して成長し、その結果、次のキャリアに移るとされる。そして役割体験、すなわちsocialな体験を継続的にを行うことを重視している。そのための支援は十分に行う必要がある。

以上のことから、学生時代にはキャリア科目を通して十分に学生の継続的なサポートすることが大切となる。また、自己実現と生涯にわたっての成長を見据えた自己の成長を促す支援は重要で、卒業後の職業選択にも大きな影響を与えられらる。

1-2 学生の職業意識に関する現状

学生にとって職業に関する知識や働き方に関する意識は、本人の生活環境の中で体験した範囲にとどまっている可能性が高い。さらに言えば、現在持っている興味・関心は学生の過去の体験に基づくものであり、これまでに接触がなかった職業や職場については、なかなか興味・関心がわからない。

学生時代に自らの意思で経験するアルバイトなどを通して、社会と関わる機会がある場合でも、自分の現在持っている力以上の挑戦をあまりせず、生活圏内の狭い範囲で体験をすることで満足している場合が多い。

しかし、インターンシップ等大学が積極的に学生に勧める体験学習は、学生が単独では気づかない、あるいは自らがこれまで経験したことがない、外部から提供され実社会と関わることのできる良い機会となる。

実践的な体験学習を経験することは、未知の学習に対する動機づけを高めることになる。そして、新たな職業や職種に挑戦することは、これまで興味・関心を持てなかったことへの新たな発見となるよい機会でもある。

2. 企業が求めている人材

2-1 企業が求めている人材事例 1

社会で求められている人材とは、実際はどのような人なのであろうか。最初に紹介するのは、パン製造販売会社¹⁾で、国内、海外市場で事業を展開しているグループ企業の事例である。ここで求めている人材は、決して特別な技術や知識を持った人材ではない。一般社会でどのような職場においても最低限必要とされる基本的な事柄ができる、またはその考え方を持っている人材である。

この製造販売会社のグループ企業が採用時に求めるのは、①とにかくパンが好き、②一流を目指し、自分の夢を描くことができる、③お客様の役に立ちたいと願う、④明るく良識がある、⑤自分で考え行動できる人であり、さらに言えば、⑥好奇心や向上心旺盛で、⑦一人で考え、自分の意見を発信でき、そして⑧雑談力も備えている、人材である。

1) 株式会社アンデルセンは、国内外に事業を展開している正社員数約1,800人のグループ企業。2015年3月期の売上は676億円。「大学行政管理学会創立20周年記念シンポジウム」パネルディスカッション資料・口頭発表参照 2016.10.1

また、採用側として大学に求める「育成しておいて欲しい」具体的な人材は、①他者と違う意見であっても自分の意見として考えをきちんと相手に伝えられる、②自分の専門分野とともに、それ以外の世界（趣味・仲間等）も持っている、③異質なものであってもそれを受け入れることができる、④グローバル（グローバル+ローカル）な人であり、基本的には前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力といった「社会人基礎力」で求められている多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力をしっかり身につけている学生を採用したいとの意見であった。

2-2 企業が求めている人材事例2

次に、自動車製造業²⁾の事例を紹介する。海外でも通用する人材育成の取り組みを行っており、在職中に社員が最低一度は海外出張もしくは、短期・長期を含めた海外生活を必ず体験させることを職場環境にしている企業である。しかし、そのための最低条件として、必ずしも最初から英語が話せることが前提ではない。この企業でのグローバルの定義は、「外国人と共同して成果をあげる人材」であるとしている。また、具体的にグローバルで通用する人材としては、①「仕事の基本」を備えている、②異文化と共に異なる習慣をも受け入れることができ、③どのような環境であってもチームワークやパートナーシップを積極的に築くことができることを挙げている。

グローバル人材として必要な要件は、「仕事の基本」である論理性やコミュニケーション力、人間的な魅力を持っている人材である。そして、異文化や異習慣を受け入れることができる人材とは、①異なる環境（自らが経験したことがない環境）であっても、自らが成長するチャンスと捉えて、それを楽しむことができること、②相手を理解し尊重できること、③伝える力と共に、価値観や理念・心情を共有することができること、④常にグローバルを意識して仕事に取り組むことであり、これらは日本のどの企業においても通用する要件である。グローバル人材となりうる社会人の第一歩は、仕事に取り組む姿勢の基本でもある。

さらに、グローバル人材として、語学力・コミュニケーション力は大切な要素であるが、たとえ、英語が堪能でなくても、主体性・積極性やチャレンジ精神・協調性・柔軟性・責任感とともに仕事や物事を実行する使命感といった、社会人基礎力で求められている基本的な考え方や行動のできる人材であるとの見解である。

2-3 社会が求める人材とは

現在、高等教育改革として、一億総活躍社会の実現に向けて働き方改革等さまざまな動きが出てきている。このような状況の下、学生は社会の動きに敏感な対応を求められている。高等教育機関は、今後ますます学生の多様性を育成する教育が必要となってくる。政府が掲げる

2) 研究開発拠点、主要生産拠点、販売拠点を海外にも数多く展開しているマツダ株式会社。

須原俊男氏 第13回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム「企業におけるグローバル人材育成の取り組み」口頭発表 資料参照 2016.9.10

一億総活躍社会における人的資源の育成は、日本経済の成長や地方創生、教育再生、生涯現役社会の実現に向けて、今後日本経済の生産性をあげるために大切な取り組みである。

産業構造の変化や新たなニーズへの対応には、教育環境や教育内容の国際化の推進と共に、留学生との交流促進も含めたグローバル化に向けたキャリア支援も必要不可欠である。さらに、働き方の多様化に向けて、例えば、製造業では、研究開発による新技術・サービスの開発の促進を求められており、非製造業においては人的資本への投資が特に重要視されている。今後「希望を生み出す強い経済」の実現に向け、若者の将来の夢や希望に繋がる人的資本への投資は、生産性を高めるための第一歩となる重要な取り組みである。

どのように長期展望をもって人的資源に投資をするのかは、図1のように短期、そして長期で計画を立てながら、一つずつ課題を達成しながらキャリアを支援する必要がある。さらに、一人ひとりが持っている個性を活かした生涯キャリアの形成は、大学を卒業した後にも引き続き行っていくことが大切であり、将来にわたり求められる人材として社会での活躍が期待される。

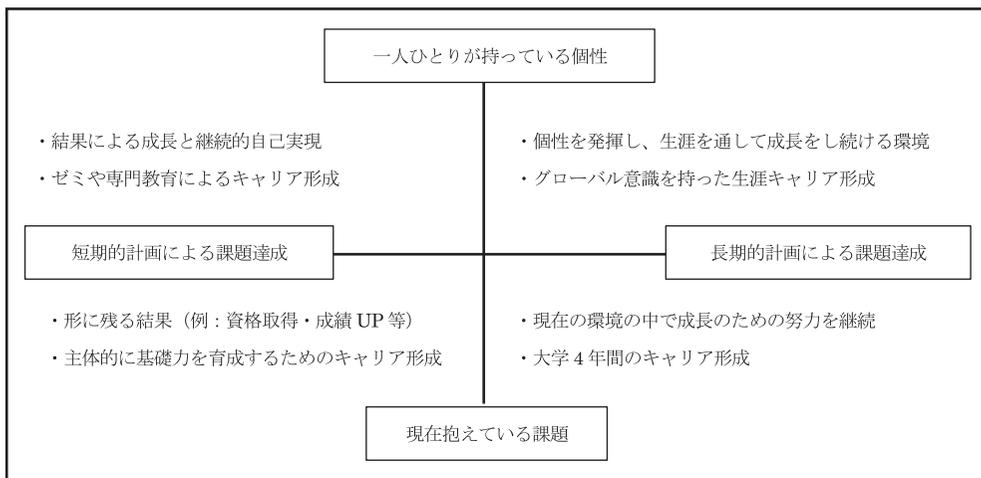


図 1 生涯キャリアに向けた座標軸

出所：著者作成

2-4 求められる人材の育成に向けて

グローバル人材として活躍するためには、社会人基礎力で求められている要素を兼ね備えた人材である。さらに、人間関係構築能力も基本的な能力として大切な要素と考えられる。人間関係を円滑にすることで、相手とのコミュニケーションも可能となる。また、どのような職場においても、コミュニケーション力と共に「感じのよさ」や「気配りができる」ことも仕事を円滑に遂行するためには大切な要素ではないだろうか。

感じのよさについて、他者から見て感じる第一の条件として考えると、見た目の印象も社会生活の中では重要となる。素直に他人の話聞く姿勢、明るく爽やかな態度、相手に思いやり

を持って接することができ、身だしなみや清潔感を感じさせる雰囲気も仕事をお互いに協力して成し遂げるためには大切な条件である。

筆者は、社会が求めているグローバル人材の基本となる人材育成について、ビジネス実務教育で求められている「働く姿勢」や「一般常識」等の基本を学ぶことで、実践的な知識を身につける一助となると考える。さらに、学生がビジネス実務教育で基本となる知識を学びながら、ビジネス系の検定試験に挑戦することにより、自己実現を目指す最初の第一歩の成長過程で自信に繋がると考える。

ビジネス実務教育では、社会人としての心構えとして、責任感、協調性、正確性、コスト意識を持ちながら、自己管理・自己啓発を怠らない人材育成を行うことを重要視し、学生の基本的なビジネス実務能力の取得を目指している。

3. ビジネス実務教育について

3-1 キャリア支援におけるビジネス系検定試験について

筆者は、現在、ビジネス実務教育に関わる授業を担当し、授業を受講した学生が学んだ知識の成果を結果として形に残すため、検定試験受験の指導も行っている。授業では、ビジネス系の試験問題を基に、多様性に対応したさまざまな方向からのアプローチで、社会が必要とする「人材」についての基本的な知識と仕事に必要な能力について学ぶことができる。

ビジネス系の検定試験問題は、将来働くことを前提に、ビジネスマナー、ビジネス文書の作成による社内文書・社外文書の違い、職場で通用するコミュニケーション力（敬語の使い方を含む）、さらに仕事上で日々発生するルーティンワーク以外の非定型業務の対処方法など、さまざまなそして基本的な社会人基礎力の分野に関する内容について学ぶ。

表1は、文部科学省後援のビジネス系検定試験の中で、特に筆者が授業で指導をしている、3つの資格試験について、出題される問題の領域をまとめたものである。

表1 文部科学省後援 ビジネス系検定試験の出題領域

ビジネス系検定名	出題される問題の領域
秘書検定	<ul style="list-style-type: none"> ・必要とされる資質 ・職務知識 ・一般知識 ・マナー・接遇 ・秘書としての技能
ビジネス実務マナー検定	<ul style="list-style-type: none"> ・必要とされる資質 ・企業実務 ・対人関係 ・社会人としての技能
サービス接遇検定	<ul style="list-style-type: none"> ・サービススタッフの資質 ・専門知識 ・一般知識 ・対人技能 ・実務技能

出所：公益財団法人 実務技能検定協会ホームページ³⁾ 参照 筆者作成

3) <http://jitsumu-kentei.jp/> 2016/11/30 アクセス

3-2 学生が履修する目的

ビジネス系の資格を取得可能な筆者担当の受講者は、毎年男子学生が9割を超える。また、男子学生だけが履修して開講される学年もある。受講開始当初、ビジネス系の資格試験は女性向けの資格であるとの認識から、男子学生の中には、ただ単に単位取得が目的で履修しており、全く資格取得に興味・関心も持たずに受講する学生もいる。しかし、授業で学んでいくうちに、コミュニケーション力を向上させ、社会に出てからあるいは学生時代でアルバイトやインターンシップに参加する場合のビジネスマナーの基本知識の必要性を理解し、資格取得にも積極的に挑戦してみようと前向きになる学生も少なくない。

ビジネス系の授業を受講しようとしたきっかけや、検定試験の受験を目指して合格まで努力を重ねた学生にアンケート調査（記述式）を実施した結果、以下のような具体的な受験理由の回答であった。

- ①専門分野の資格取得をする前の2回生終了までに、基本的ビジネスマナーを身につけておきたかった。
- ②親戚の結婚式に出席し、目上の人と初めて言葉を交わす機会があった。相手の年齢や歳の離れた社会人と話をする機会があったが、大学生になったのにも関わらず敬語を使って目上の人との会話ができない為、ビジネスの基本から学ぶ必要性を感じた。
- ③最初は、時間割上たまたまその時間が空いていたので1回目のオリエンテーションを受講してから決めようと軽い気持ちで受講。自分で社会常識のなさに愕然として、その後一度も休まず出席し、ビジネス系の検定試験受験にも興味を持った。
- ④言葉遣いや仕事への取り組み方を学ぶうちに、せっかく受講しているのだから資格試験にも挑戦して、結果を出して自信に繋がりたいと感じたため。
- ⑤周りの友達が資格試験に積極的にチャレンジしているので、自分もその気持ちになった。

きっかけはさまざまであるが、ビジネス実務に必要な基本的な常識を学び、結果を出すことで、自信に繋げていこうとする努力が見受けられた。

ビジネス系の授業では、授業開始前の時点で社会人基礎力について、どの程度の知識があるのかについて、アンケート調査を行った。さらに、3回生でインターンシップの授業を受講し、就業体験を控えている学生にも同様のアンケート調査を実施した。

また、他大学において、全くビジネス系の授業ではないが、授業のスタート時から社会人基礎力となりうる基本的な言動ができる学生にもアンケート調査を行い、それぞれの状況を基に分析を行った。

4. アンケート調査

4-1 アンケート調査の詳細

アンケート調査は、基本的なマナーや挨拶等、社会に出てから必要となる基本的な社会人基礎力を確認する調査である。調査をしたのは今回3クラスで、他大学1回生情報教育科目の受講生、ビジネス系の検定試験の受験を目指すビジネス実務科目を履修し学び始めたばかりの2

回生、さらに15回の授業履修終了後、インターンシップに参加予定で就業体験を控えていた3回生の3クラスの異なった状況でのアンケート調査である。

今回は、クラスの履修科目が同一ではなく、学年も1回生から3回生までと大学に入学後の在籍期間、授業科目も違う受講生へのアンケート調査であった。そこで、それぞれのクラスでの授業態度、1回目の授業への出席率、授業に向き合うモチベーションの違いによって、どのような違いが出てくるのかについて、分析・考察を行った。

3クラスの履修授業科目の内容は異なっている。さらに、ビジネス系の授業科目を履修した学生や、すでに大学で2年間のキャリア支援関連の教育を受け、少しは自信を持って授業に前向きで基本的なことはできるはずである3回生のクラスもあるため、本来であれば学年が上がるごとに結果は、良い方向に推移するという状況となるはずである。しかし、第1回目の授業態度や、学生のモチベーションの違い等により、「大学入学前の生活環境が大きく影響する」という仮説を裏付ける結果が顕著に表れた。

特に、第1回目の授業における学生の授業態度や意欲について、筆者が、授業中に感じた状況と、実際にアンケート調査を行った詳細な分析において、大変興味深い結果が出た。

アンケート調査の内容は、基本的な社会人基礎力に関するアンケート調査項目であり、表3の20項目である。今回は、紙面の関係で一覧表示とした。

アンケート調査を実施した3クラスの人数とその受講者の状況は、表2のとおりである。

表2 3クラス履修学生の状況一覧

受講内容	学年	受講者有効回答数(人)	受講者の受講態度を含む状況
他大学情報基礎教育(必修科目)	1回生	33	<ul style="list-style-type: none"> ・15回の授業で、遅刻・欠席者はほとんどない ・第1回目で挨拶指導を行い、2回目から全員自ら挨拶をして、教室に入室 ・授業中の私語で注意をすることは一度もない ・基本的マナーについては、第1回目で説明をし、注意事項を説明、2回目以降は特に注意することはない ・積極的に質問をする態度が毎回の授業で見られる ・授業中の質問以外私語はほとんどない ・テキストの購入や筆記用具忘れはない
ビジネス実務科目(選択科目)	2回生	25	<ul style="list-style-type: none"> ・1回目の授業から、遅刻・欠席者が複数人あり ・授業中の私語で注意する場面が毎週あり ・授業中に居眠りをする学生少数あり ・授業中・スマートフォン等を机の上に出している、または隠れて操作している学生あり ・帽子をかぶったままの学生に注意することあり
インターンシップ参加に向けた授業科目(選択科目)	3回生	22	<ul style="list-style-type: none"> ・1回目の授業から、遅刻・欠席者が複数人あり ・授業中の私語で注意する場面が毎回あり ・授業中・スマートフォン等を机の上に出している、または隠れて操作している学生あり ・集中力が欠如している学生が複数人あり ・初日から挨拶マナー指導をしても態度の改善がなかなか見られず

4-2 調査の内容

3クラスとも、授業がスタートしてから、3回目の授業時間中にアンケート調査を行った。アンケート調査の項目は表3のとおりである。紙面の都合で、一覧で表示とした。

表3 アンケート調査20項目の一覧

1. 会話や電話対応の場面で、正しい敬語を自然に使うことができる	6. その場に相応しい立ち居振る舞いが自然にできる	11. 突発的な事態に対応して、臨機応変に対応できる	16. 字は丁寧に書くようにしている
2. 尊敬語・謙譲語・丁寧語の違いが判る	7. 「挨拶」は基本なので、自分から率先して「挨拶」をしている	12. 自分の周りの人とコミュニケーションをうまく取ることができる	17. スマートフォンや携帯は、マナーなので授業中は机の上に出していない
3. その場に相応しい言葉遣いを自然に使うことができる	8. 何事も計画的にすることができる	13. 相手の性格や状況を判断して、状況にあった接し方ができる	18. 一度注意されたことは、二度としないように気を付けている
4. 先生には、敬語を使って話をしている	9. 課題や宿題は、遅れて出したことがない	14. わからないことがあったら、自分から積極的に質問している	19. かばんは机の上に置かないで、授業を受けている
5. 先輩には、敬語を使って話をしている	10. 困ったことがあったら、周りと協力して行うことができる	15. 遅刻して入室した場合、きちんと報告をしている	20. 筆記用具を忘れて学校に行ったことはない

以上の内容について、各項目を5段階評価（⑤かなりできる、④ややできる、③標準的、②あまりできない、①ほとんどできない）で学生が評価を行った。各項目とも社会人基礎力では基本的な内容であるが、調査を行った結果、表3の20項目の内、ビジネス実務教育を行う以前の、大学入学前の段階ですでに身につけているはずの基本的項目についても「あまりできない」と自信のない回答をする学生も見受けられた。

4-3 調査の結果

3クラスの比較を全項目で実施したが、本稿では、「かなりできる」と学生が評価している項目に絞って検討を行う。その他の項目については、より詳細な分析・考察を行った後に論じる予定である。

情報関連科目の履修クラスの結果は、ほとんどの項目で「かなりできる」「ややできる」を選択していたが、2回生のキャリア関連科目を履修している学生や3回生でインターンシップ前の学生は、すべての項目について、「出来ない」、あるいは「自信がない」という回答を選択しており、「かなりできる」と回答した人数が少ない結果であった。特に「9. 課題や宿題を忘れずに提出する」「3. その場に相応しい言葉遣いが自然にできる」については、「できない」

と回答した学生が多かった。

3 回生のインターンシップ科目履修クラスの学生で、「かなりできる」と回答した項目は「10. 困ったことがあったら、周りと協力して行うことができる」であった。3 回生になると、大学内での人間関係も円滑になり、学校生活を充実させるための人間関係構築能力や他人との関わり方について、自信を持てるようになっていっていることがわかる。人との関わりの中で、コミュニケーション力は育成される。コミュニケーションに自信が持てるようになると人間関係構築能力も高まり、インターンシップの実習体験でも大いに役に立つはずである。コミュニケーション力に関しては、学生生活の中で成長の結果が出ているものと思われる。しかし、2 回生と同じように「9. 課題や宿題は、遅れて出したことがない」という項目に関しては、思ったほど良い結果ではなかった。意識の問題ではあるが、まだまだやらなくても「何とかなる」という甘い考えがあることがうかがわれる。

他大学情報関連科目の学生は、入学後間もなく、また、情報基礎教育の授業であり、全くビジネス系の授業を受講していないが、「4. 先生には、敬語を使って話をしている」や「5. 先輩には、敬語を使って話をしている」というコミュニケーションを円滑に行うために必要な言葉遣い

の基本は、すでにきちんと使い分けができていっているという結果となった。さらに、基本的な授業を受ける態度や状況に合わせた行動についても申し分のないものであった。物事の理解度や意識の問題でもあるが、1 度説明を聞いた内容や注意事項について、次の授業から問題なく対応

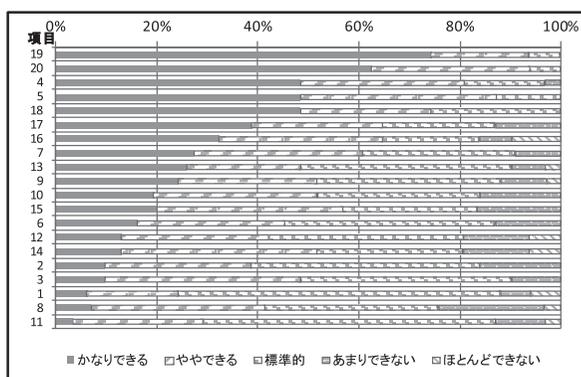


図1 1 回生 情報関連科目履修クラス (他大学)

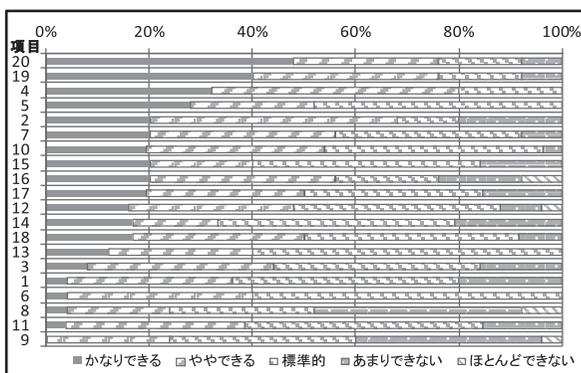


図2 2 回生キャリア関連科目履修クラス

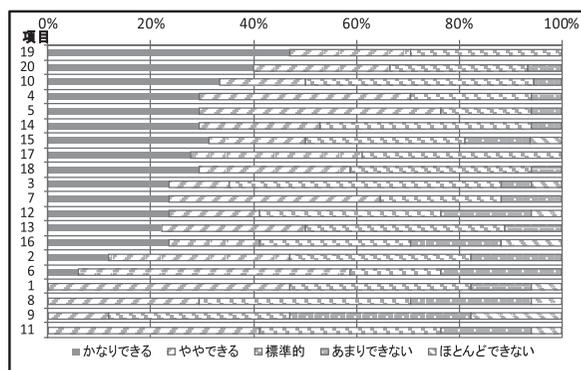


図3 3 回生 インターンシップ科目履修クラス

できることは大切な基本姿勢である。将来社会生活をするうえで、社会人基礎力として先輩からあるいは上司からの注意事項にきちんと耳を傾け、同じ失敗を繰り返さない姿勢は、社会人として重要である。

5. 今後の課題

深澤（2015）によると、自ら学び考える能力を開花させ、企業で伸びる人材には、図4のようなコンピテンシー（再現可能な行動特質）・グロース（成長）モデルによる流れがあり、大学は社会に出る前に能力を磨く場であるとされる。

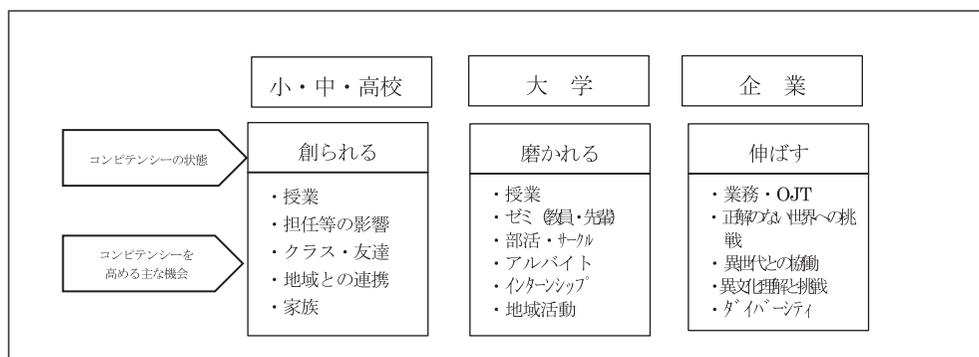


図 4 コンピテンシー・グロース（成長）モデル

出所：深澤（2015）p.15の図をもとに著者一部修正

アンケート調査の結果や、入学した段階で見受けられる学生の学習態度やコンピテンシー・グロースモデルの考え方から検討すると、筆者は、社会で通用する「生きる力」が、大学だけで育成できるものではなく、大学入学時にすでに学生個々の環境の下で、社会的基礎力の差異として生じていると考える。そのことを踏まえ、それぞれの担当クラスの状況をよく把握し、学生のバックグラウンドや状況にあった指導を行うことが、今後の課題として必要であろう。そのためにも、引き続き授業で学生の状況を把握するための調査・検討をすることが必要と考える。大学1年次から継続的にきめ細やかなキャリア支援を行うことで、まず基本的な態度や行動の変化を促すための意識の改革を行い、それによって、実践的な社会との関わり方や良好な人間関係の構築に必要な知識を身に付けさせることが必要である。

特に、今回の調査では、学生の大学入学時まで創られてきたコンピテンシーの差異によって、学びに対する意識や態度は違うということが考えられる。

学生の基本的スキルが入学時の段階で、入学を希望する大学のレベルの違いや本人の意欲・意識の違いによって差異があるのかについても、今後引き続きアンケート調査を行うことで検証し、クラス毎の状況に合わせた授業運営を行っていきたい。

おわりに

今後ますます、グローバル化に対応した人材育成が求められる。2007年6月に公布された学校教育法⁴⁾の一部改正により、教育基本法の改正を踏まえ、義務教育の目標が具体的に示されるとともに、小・中・高等学校においては、「生涯にわたり学修する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させると共に、これらを活用して課題を解決するための必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた（第30条第2項、第49条、第62条等）。

これらの規定は、その定義が常に議論されてきた学力の重要な要素で、

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③学習意欲

であることを明確に示すものである。

いつの時代にも必要なことは、生涯を通して必要となる「生きる力」の育成ではないだろうか。この「生きる力」の資質・能力については、社会がいかに変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性をもってたくましく生きるとともに、生涯現役の考え方も今後の一億総活躍時代では求められている。その基本的な人材育成のキャリア支援をビジネス実務教育の考え方を活用することで、今後も考察を行っていききたい。

参考・引用文献一覧

1. 石川仙太郎 文部科学省高等教育局大学振興課（2016）『西日本私立大学振興協議会 大学に求められる教育改革と広大接続』 文部科学省
 2. 一億総活躍社会
<http://www.kantei.go.jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/dai1/siryoku3.pdf> 2016/10/1 アクセス
 3. 浦上昌則（2010）『キャリア教育へのセカンド・オピニオン』 北大路書房
 4. 金岡敬子（2016）「高等教育に求められる学修評価に関する一考察」 四天王寺大学紀要第62号
 5. 経済産業省
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf 2016/9/22アクセス
 6. 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
 7. 深澤晶久（2015）「一生涯のキャリア形成のために大学は社会と協働を」『Between』10-11月号 pp.14-15
 8. 文部科学省（2010）「キャリア教育・職業教育特別部会第二次審議経過報告」
-
- 4) <http://www.houko.com/00/01/S22/026.HTM> 2016/10/30 アクセス

9. 渡辺三枝子他著 (2010) 『学校教育とキャリア教育の創造』学文社
10. National Career Development Association, *The Career Development Quarterly Volume 43 Number 1*. National Career Development Association (1994) 全米キャリア発達学会著 (1994) 仙崎武・下村英雄編訳 (2013) 『D・E・スーパーの生涯と理論』図書文化